

# 図書館たより

号数 第 32 号  
発行日 昭和51年 3月20日  
編集行 島根県立図書館  
松江市内中原町52  
TEL(0852)22-5725  
印刷 (有)高浜印刷所

題字：和漢古典から



(こども室のひろさがり)

## 51年度の図書館事業について

ご承知のように、昭和48年のオイルショック以来日本の経済は低迷状態を続け、昭和51年においても依然として低迷路線をたどらざるを得ない現況であります。

こうした中で、県立図書館事業も緊迫した地方財政事情の下では、あまり期待した予算を獲得することもできず残念に思います。

しかし、苦しいながらも中央資料館としての役割をもつ県立図書館として、必要な各種資料の収集整備に努めるとともに、現代社会に即応する県民の図書館として、積極的な活動を行ない、少しでも文化向上に役立てたいという運営方針に基づき下記重点目標を定め図書館事業を大いに進めていきたいと考えています。

### 重点目標

#### 1. 資料の収集と活用

充実した各種資料の収集整備を積極的に進め、特に基本図書、郷土資料、古文書類の徹底的な収集を行ない保存に努めるとともに、著者名目録カードの作成、蔵書目録の追加等を行ない資料の活用に一層の便を図る。

#### 2. 読書普及振興事業、文化活動の強化充実

生涯教育の一環として各種文化活動を積極的に行なうとともに、県内公共図書館、公民館図書室との相互連携、図書センターの増設、自動車巡回文庫等による地域読書活動の指導援助の強化を図るとともに、図書館のサービス網の充実を図る。

#### 3. 図書館職員の研修

専門職員としての知識をフルに活かすため、また県民の皆さんから求められる資料を十分に提供し得るために、一層職員の資質向上を図る。

島根県立図書館次長 平 野 徹

# 随 想 入 学 案 内

長 沢 雅 男

東京大学助教授

(教育学部 図書館学担当)

数日まえ、旧友から小包が送られてきた。卒業した高校の同窓会名簿であった。

開封するなり、まっさきに同期の名前を追っていた。友人の名を手がかりに、忘れていた記憶が急によみがえってきた。それはつぎつぎに他の友人の名に結びつき、それらの友人と過ごした高校の廊下、教室、さらに校庭へと連想が拡大していった。ひとりひとりの氏名をたどってゆくと、20数年もお互いに会っていない友の顔がはっきりと目に浮かんで消えてゆく。

折りも折り、その日に家内のほうにも、30年ぶりに小学校のころの友だちという女性から電話があった。一冊の同窓会名簿と一人の友だちの電話によって、わが家は急に戦後の一時期の記憶の世界に引きもどされたのである。

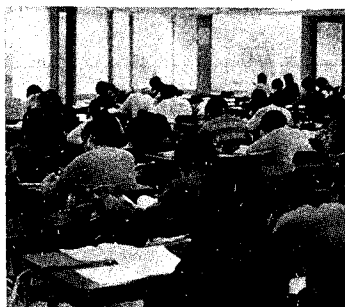
しばらくは、懐しきで興奮気味に物資不足のころの高校生活について語り合ったが、やがて電話をくれた友人の生いたちに話題が移ったとき、単純に過去を懐しんでばかりはいられない気分になってきた。

その女性は、幼いころ父親を戦争で失い、弟と二人、母親の手助けをしながら苦勞して育ったそうである。それもやっと小学校を卒業するまでのこと。中学校に入らなければならぬころに、その母も病没し、学校どころではなかったらしい。他家の下働きに使われ、その日その日をしのぐ生活が永らく続

いたそうである。

しかし、何といっても彼女は働きもので、生来の明るさだけは失わなかった。年ごろになると、働きものの好伴侶を得て、共稼ぎをはじめ、一応、生活の安定を求めることができたというのである。今でも自転車の荷台にさまざまな乾物やら生ものなどの食料品を満載して山間部に出かけ、行商をするのが日課だということである。

この人たちの長男が来年は高校を卒業するので、大学に進学させたいということから、たまたま東京



(学生の自習風景)

の大学に勤めているというつてを求めて、久しぶりに電話をかける気になったようである。その電話というのは、「東京の大学と名がつけばどこでもよい。だれでも入れそうな大学を探して、その案内書を二つ三つ送ってもらえないか」という趣旨のものであった。

何かお役に立つならばと、早速、本屋にいて受験相談コーナーをのぞいて驚いた。何とたくさんの大学の入学案内が並んでいることか、グラビアの写真入りで大学の建築や設備が紹介され、建学の精神とか、特典とか、さらには卒業後の進路など、れいれいしく美辞が連ねられている。写真うつりがよすぎる建物施設はともかくとして、分譲マンションの広告も顔負けの誇大な学園紹介を眺めているうちに、ほとんどあきれ返ってしまった。

それでも、わざわざ出かけたこともあって、三つ

ほど買い求めてきた。しかし、それから数日を経た今日もまだ、それは机の片すみに置かれたままである。先方はまだ送ってこないかと心待ちにしているかも知れない。だが、くわしい説明ぬきで入学案内だけを送ったならば誤解を招きはしないかと送りそびれている。

首尾よく入試に合格ということになったとしても、汗水たらして行商で得た金が、ごっそり入学金とか施設拡充費とかの名目で数枚の領収書と交換されるだろうことを想像すると、無責任に入学案内を送る気にはなれないのである。

もっとも、大学など過大評価しないで、案外、さっぱりと割切った上での依頼かも知れない。現在の若者にとって、同世代の3人に1人は大学生なのである。去年の11月ごろだったろうか。ある週刊誌に、多数の大学卒業者がパンの運搬に従事しているという記事が大きくとりあげられていたが、間もなく、そんな話題には誰も眼を向けない時期が確実にやってこよう。現実の大学は戦前の大学の理念をもってするかぎり、もはや大学の名を冠するに値しないものになってしまった。

しかし、それにしても都会での学生生活にはあまりにも無駄な金がかかりすぎる。国立大学はまだしも、諸物価に加えて学資の急騰は著しい。物価の上昇にスライドさせて、毎年納入金を上げている私立大学がふえている。本当の教育をしようとする金がかかる。私学助成が叫ばれても、必要なだけの国庫補助がなければ、いきおい大学ではさまざまな自衛策を講じるのも無理からぬことである。

入学案内のパンフレットは本屋やデパートで売られる商品と化している。大学で各種の証明書を作ってもらうにしても、そのたびに結構高い代価を請求される。金に換算するのは語弊があるにしても、高いと感じる最たるものは卒業証書ではなかろうか。しかも、大学の大衆化傾向が強まり、学生の質的低下に比例して、卒業証書が貧弱なものになってきて

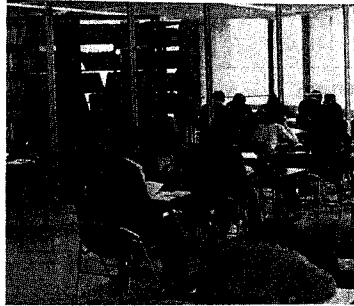
いるようである。卒業証書——それがやがて無意味なものとして顧みられなくなる時代がやってきたとき、本当の大学が生まれるのかも知れない。

だからといって、受験期を迎えている若者をそのときまで待たしておぐわけにはいかない。今日の一般的状況からみて、本人に意欲があり、図書館を効果的に利用する方法を身につけているならば、アルバイトの合間に教室に顔を出すような学生生活よりも、ずっと大きな成果をあげることができるはずである。しかし、大学では知識を学びとるだけではないはずである。また、依然として学歴社会が存続するかぎり、みすみす不利な条件のもとにわが子を放置しようとする親はあまりいないだろう。ましてや義務教育さえ満足に受けられず、何かにつけて肩身が狭い思いを味わった親にしてみれば「苦勞をしてもわが子を大学に」と思うのは人情であろう。

自分たちが果たせなかった大学生活の夢を息子に託そうとする親心から大学に行かせようとするのであれば問題は深刻になる。そのような親心が果たしてどの程度子供に通じるものなのか。大学に入ってしまったら目標が達成された

ばかりに、うかうかと4年ないし5年間を過ごして大学を去っていく若者があまりに多いことを知っているからである。大学生活において、若さのもつ可能性を十分に発揮しえたかどうか、毎年のことながら、卒業生を送り出すたびに考えさせられる。

あれやこれやと思い惑ううちに、先方のいう通りに急いで入学案内を送るよりは、できるだけ早い機会をつくって本人と直接会って来春どのような希望を抱いて大学に入学しようとするのか、はっきりと意向を尋ねた上で相談に乗るほうが一番親切ではなかろうかという結論に達した次第である。



(資料室風景)

島根県簸川郡斐川町直江出身

主者：「参考調査法」

(理想社)

# 新年度の図書館事業についての詳細

## 昭和51年度 県立図書館各種講座受講生募集要項

各講座とも4月から開講いたします。どなたでも気軽に受講できます。

○申込方法 「住所、氏名、電話番号、受講講座名」をハガキまたは電話で次へ。

〒690 松江市内中原町52 島根県立図書館振興課（電話 松江22-5730）

○締 切 昭和51年3月31日

|                   | 図書館読書教室  |                 |                 | 日本文化講座  | 古典文学を<br>読む会  | 図書館<br>サロン  | 古文書を読む会  |  |
|-------------------|--|-----------------|-----------------|---|---|---|--|--|
|                   | ①松江会場  | ②傾原会場           | ③日原会場           |   |   |   | 入門講座   | 中近世講座  |
| 開講日               | 第2火曜日  | 第 曜日            | 第2火曜日           | 第2火曜日   | 第2・4<br>木曜日   | 第3土曜日   | 第1土曜日  | 第3土曜日  |
| 時 間               | 13:00～<br>15:00  | 13:00～<br>15:00 | 13:00～<br>15:00 | 10:00～<br>12:00   | 14:00～<br>16:00   | 14:00～<br>16:00   | 13:30～<br>15:30  | 13:30～<br>15:30                                      |
| 会 場               | 県立図書館  | 社会教育<br>センター    | 山村開発<br>センター    | 県立図書館   | 県立図書館   | 県立図書館   | 県立図書館  | 県立図書館  |
| 募 集<br>人 員        | 50 名   | 20 名            | 20 名            | 40 名  | 40 名  | 20 名  | 50 名   | 50 名   |
| 開 講<br>期 間        | 1 年  | 1 年             | 1 年             | 1 年   | 1 年   | 1 年   | 1 年  | 1 年  |
| 対 象               | 一 般  | 一 般             | 一 般             | 一 般   | 一 般   | 青 年   | 一 般  | 一 般  |
| 経 費               | 無 料  | 無 料             | 無 料             | テキスト代<br>を 除 き<br>無 料   | テキスト代<br>を 除 き<br>無 料   | 無 料   | テキスト代<br>を 除 き<br>無 料  | テキスト代<br>を 除 き<br>無 料                                |
| 講 師               | 各地域における読書に関する指導<br>者   |                 |                 | 県立図書館<br>奉仕課長<br>藤岡大拙<br>ほか                                     | 元広島女学<br>院大学教授<br>宍道 達  | 県立図書館<br>長<br>速水保孝<br>ほか                                      | 県立図書館<br>桜木 保  | 県立図書館<br>藤岡大拙<br>藤沢秀晴                                |
| 講座の<br>趣旨と<br>内 容 | 健康で文化的な社会生活を営むための契機を読書に求め、本に親しむことにより、健全な思考力を養い、豊かな社会生活を営むための講座です。<br>各地区とも、受講者をグループ編成し、同じテキスト（本）により集団読書して、体験の交流をはかり和やかな雰囲気の中に地域の社会人としての教養を高めるよう配慮されています。 |                 |                 | 日本文化発展の概観を体系的に知るための講座です。<br>現在郷土の歴史を日本歴史とのかわりの上にとって平易に講義されています。 | 原典のもつ文章美やその時代の人間の姿を理解し、味わうため古典文学の原文を読む講座です。<br>現在源氏物語の講義が行われています。 | 青年のもつ真しな探究心を養いこれを伸ばすため、読書をとおして人生や社会の諸問題を論じ、自由な話し合いの場所をもつものです。 | 県立図書館が編集した「古文書ハンドブック」その他のテキストにより、初歩から手ほどきし、古文書の読解力養成につとめる講座です。 | 入門講座を終えた程度の読解力をもつ人を対象に読解だけでなく史料の背景にある郷土史の研究にも及ぶ講座です。 |

# 毎年行っている各種講座の受講生の方 から感想文をお寄せいただきました。

## 「古典文学を読む会」

三 苫 文 絵

「源氏物語」が図書館の棚に並ぶ種類は、註釈付の原文、学者、歌人、小説家の訳に成るものから現在、週・月刊紙に連載されているものを入れるとその数は多く、私達はそのいずれをも好みによって読むことができます。それは年の暮に多くの人によって演奏されるベートーベンの9番を、好きな指揮者、気に入ったコーラスの演奏に必ず耳を傾けることが出来る状態に似ています。

私が「源氏物語」を読んだのは、17から18の年令でした。20余年経た今、思い出してみると登場人物を記憶しているに過ぎない読み方をしていたために、それは、確かな音を知らずに楽譜を棒読みし、音楽が聴こえていないのと全く同じであったことを認めないではられません。そのような情ない事情のためか、去年7月に受講させていただくようになり、物語の面白さに毎回驚いています。

初めの日には、『常夏』の終りに近い夏から始めました。話は内大臣の娘と名乗り出た、早口でがさつな近江の君が、鏡に写る自分の姿に実によく似ているので大事にはしているが、恨めし気な頭中將の中年男ぶりでした。その後、回を重ね、受講している今は、『若菜』(上)。法体となられた朱雀院の14才の女三の宮の御後見立となられる、40才の源氏の生活が始まるどころです。

初めて読んだ時から20年余り経ち、若い時には面白いとは思えなかった物語が、歳月を経てこのように面白いということが私にはうれしく、この先、今回のように20年の月日を置いて此の物語を聴く時、それは今よりも一段と面白く感じるができるかもしれないと思えば(毫碌しない限り)早く60才になり、80才になって、又、宍道先生の講義を聴かせていただきたいと心から願っています。

## 「図書館婦人教室」

松 本 キヨコ

本を読みたいとは常々思いながらも、付録ばかりのようなケバケバしい婦人雑誌を買う気にもなれず、貸本屋の本は気がせて落ちて読めず、さりとて図書館には、うんとよい本があることは知っていても、何となくおっくうで行けず、家の若い者が図書館から借りて来る本をたまたま読むぐらいのことでした。何年間も、身心共に沈滞して、どうにもやりきれないでいた自分自身からなんとか抜け出すことができそうで、これからの人生に、明るさをみつけられそうな気がしていた矢先に、まるで符を合わせたように「婦人教室」に入らせてもらう機会を得たことは一層の幸せでした。

何よりうれしく楽しかったことは、同じ班の方とは同じ本に対する感想、作者の考え方、人生観、人柄などについて、他の班の方からは、読まれた本について、作者についてのそれぞれのお考えを聞かせていただき、それにあわせて、自分達の日常生活、育ってきた背景、考え方、生き方などについて語り年代の差を越えて、老人と若い世代、子供達との、教育について、戦前、戦中、戦後に生きてきた作者と自分達についてなど、真剣にしかも腹藏なく、それぞれの立場から、少しのテライも飾りもなく語りあうことができたことでした。

特に私にとってうれしかったことは、若い人達がとても主体性をもって、随分とたくさん本をよく読んで自分のものにしておいでのことでした。昔の私達のように概念的でなく、しっかりと自分を確立した姿勢で生きておられることでした。そうした若い人達と、まるで学生時代のようなびやかな雰囲気の中で、語り合うことによって、その若さを直に、硬直しかかっている私の心の中へ注入することによって、若さを取戻すことができたことは本当にうれしいことでした。

遙かに遠い存在として憧れていた図書館が、身近なものになったことは、これからの私の人生に大きな力となるでしょう。

## 「出雲の迷信」

速水保孝著 学生社 980円

「狐持ち」それは出雲・隠岐地方に流布されるいわれなき迷信である。この迷信発生の際の謎を著者は多くの資料と自身の体験をもとに、社会経済史的手法をふるって解明した。排他的風土で根付き変遷していった迷信は今も一部に残存する。種々の偏見一掃のため、その啓蒙の役割を果そうとする著者のいきごみが、行間にあふれている。

## 「ある愛」

中村光夫著 新潮社 1,000円

「弟」の「女友達」を「兄」が奪い、それに刺激を受けた「弟」が彼女に対する愛を自覚する。一方、「女友達」の方も夫である「兄」に対する愛が本ものであるのか疑問を持ち始め、結婚生活に行きづまりを感じ、「弟」の方へよりどころをみいだそうとする。

この小説は、成人した兄と弟の間に一人の女性が入りこんできた時、浮きばりにされる互いの性格、考え方の差、兄弟の位置関係を、例えば、専攻を同じくする大学教授である「兄」と学生である「弟」、出世を望む「兄」と背を向ける「弟」、俗物的な面と理想主義的な面を相対比させて描かれる。

又、「女友達」が女性として成長していく過程をタイプの違う2人の男性とからませて展開させている。

## 「マザー・グースのうた」

谷川俊太郎訳 草思社 800円

「マザー・グースのうた」というのは、昔からイギリス、アメリカの子どもたちに親しまれてきた童謡をひっくるめてのよび名である。外国の詩の訳出は、むずかしい仕事であり、いろいろな問題も含んでいるが、そういう中で、これは谷川俊太郎の訳と堀内誠一のイラストレーションとあいまって、のびやかで、明るい斬新なマザー・グースの世界を創り出している本である。

## 「山陰の年輪」

内藤正中編 創樹社 1,200円

年輪は長い年月をかけ厚い層をつくり出す。同じように、地域もまた多くの歳月をかけ、独自の風土を生み出してゆく。本書は山陰に築かれた年輪を、自然・景観・味覚・名産・民芸・行事・信仰・伝承・世相・史蹟・人物・学芸・芸能と分野別にし、事典の記述方法によって、各々の事象に解説を加えている。手軽に使えぬ郷土物知り百科として便利を一書。

## 「不帰」

金芝河著 李恢成訳 中央公論社 1,200円

金芝河は、朝鮮半島が生んだ不滅の詩人であり、革命家である。彼が生れ育った一帯は、韓国の中でも不当に差別された地域であり、抵抗運動の闘士を生んでいる。こうした革命や抵抗の伝統は、金芝河の詩業や、生き方を貫いている。1970年、長篇諷刺詩「五賊」を発表、つづいて処女詩集、「黄土」を刊行、その抒情的な詩も抒情にとどまっただけで、抵抗の歴史の中で挫折をくり返すしかなかった人々の深い「恨」を受け継ぎ、吐露した。

本書には、未発表の抒情詩、獄中で書いた「良心宣言」をはじめ、訳者李恢成の金芝河論等が収められている。これらの作品の中から、彼を人間的な喜怒哀楽と欠陥を併せ持つ人間として、又、不退転の生き方と、底流している民族愛と人間愛を見出し、詩篇にこめられた悲痛な詩人の心境をうかがい知ることができよう。

## 「人間の歴史」

イリオン&セガール著 岩波書店 500円

「人間の歴史」は、人類の文化がどのように発生し、どのように発展していったかを、歴史全体の流れのうえでとらえている。

特にここでは、労働がどんなふうに変え、教育し、完全なものにしていったか、人びとの考える力が、いかに多方面に深く結実していったか、その人類のいく千万年のたたかひの歴史を、正しく、かつわかりやすく伝えている本である。

# 新刊図書紹介

## 「新編・物語藩史・第9巻」

新人物往来社 4,800円

全12巻のうち中国地方の諸藩を収録。島根県関係の藩は松江藩（藤沢秀晴著）、浜田藩（矢富熊一郎著）、津和野藩（沖本常吉著）の3藩が載せてある。各藩の歴史が克明に記述され、たやすく読める書き方が、一般向けのもので親しみやすい。巻末の諸藩一覧によってその他の小藩の概略を知ることできる。

## 「火宅の人」

檀一雄著 新潮社 1,500円

先頃亡くなった著者の遺稿。

自由奔放に生きた著者の20年を綴った自伝的作品である。

先妻の子、日本脳炎で廃人となった次男等、複雑な家庭で、妻と5人の子供を大切に思いながら、若い愛人との生活も捨てない。ある意味では強い人である。

広辞苑によれば「火宅」とは煩惱が盛んで不安なことを火災にかかった家宅にたとえていうとして、現世、娑婆とある。正に火宅の人。

著者は、太宰治、坂口安吾と同世代の人である。

他の著書に、「花筐」「虚空象嵌」「リツ子その愛」「同その死」「石川五右衛門」「長恨歌」「悲しみの門」「聖マリヤの鐘」「女の山彦」等がある。

## 「相撲昭和史—激動の50年—」

高永武敏著 恒文社 3,000円

大相撲は48年初場所の満員御礼が一場所14回の新記録をつくったという。それ以後も人気がつづき、相撲景気はまずは万々才というところである。ところでこの人気はどこから来るものか。世が不景気の時にスポーツ・娯楽に熱中するのが、せめてものはない庶民のうさのはらしどころというべきか。それはともかく、世相が相撲に反映していることは確かである。戦時中無敵の双葉山は連戦連勝の軍国日

## 「後鳥羽上皇と隠岐」

後鳥羽上皇聖蹟顕彰会 1,600円

隠岐島前で晩年を終えた後鳥羽上皇に関する集大成の書。豊富な写真は史蹟を如実に説明し、歴史家・小説家・刀剣研究家・郷土史家による執筆は、隠岐における上皇をあらゆる角度から探り、浮き彫りにする。それに加えてこの一冊は、隠岐島前の観光案内的要素も、たくみに組みこまれている。ひとつの町で作りあげた郷土愛溢れた書ともいえる。

## 「ある昭和史」

色川大吉著 中央公論社 980円

著者はいう、「この本のどこかに読者がいる、あなたがいる」そういわれるような歴史叙述がしたかった、と。

敗戦後30年、昭和と改元されてから50年、国民は波乱の歴史に翻弄されつつ生きてきた。この激動の昭和史を生きぬいた民衆ひとりひとりのかけがえない経験を積み重ね、組み合わせ、構成することから、ゆたかな時代の全体像を浮かび上がらせることはできないだろうか。すなわち、現代史の演技者、創造者としての一庶民の体験を足場にする方法である。それが、本書の提起した新しい歴史叙述スタイル「自分史の試み」である。

歴史家もまた行動する一個の民衆であり、歴史の共同責任者である。歴史家である著者自身の体験を含め、一地方に生きた無名の常民の貴重な足跡をとおして、生き生きとした我々自身の現代史が本書にはある。

本の申し子であった。双葉山が勝つたびに館内はわきにわたるのである。

一方、力士と言えども生活者である。一定の収入があつてこそ、落ちついて相撲が取れるというもの。そのためにこそ戦前の力士は体を張って協会に抗議した。しかし歴史は皮肉なもの。関取のサラリーマン化が実現して以来、稽古不足の力士が増えて来たという。ともあれ、力士は強くなければならない。とりわけ横綱はそうである。名横綱双葉山、大鵬などの軌跡をたどっていくのは本当に楽しいことだ。

◎「子どもに安全な食べもの」 河野友美著  
ドメス出版 600円

汚染された食品の多い中で、子どもにとって安全な食べものとは何か。子どもの時の食べものが一生を支配するともいわれ、母親は子どもの食生活に関して大きな影響力をもっている。その母親が、食品に対しての正しい知識を貯えるには、格好の書。

◎「土筆野」 中里恒子著 文芸春秋社 1,900円

親の反対を押し切って国際結婚をした一人娘を想う親心を、女らしくて繊細なタッチで描く。

同居を願う娘の思いを拒みながら、一人暮らしを続ける著者。時には寂しくてたまらない思いをしながらも“ほそぼそと風の吹くままのような暮らし。が自分の生きる場所であるという、私小説。

◎「祭りの場」 林 京子著  
講談社 750円

戦争の記憶も、原爆の体験も、歴史のかなたに風化されようとしている時、自己の重く切実な体験をモチーフに、生き残ったものの深い祈りをこめて、戦後30年の意味を現代に問いかける鎮魂の作、昭和50年第73回芥川賞受賞作。

◎「細川ガラシャ夫人」  
三浦綾子著 主婦の友社 980円

著者初の歴史小説。  
明智光秀の次女として生まれたガラシャ夫人の戦乱の世を熾烈に生きた姿に、作者の信仰と愛が投影され、著者自身の持つ“理想的人間像”が浮きぼりにされている。

◎「紀子の場合」 稲沢潤子著 東邦出版社  
780円

かけがえのないのちの自由を大切にしようと思う主人公。「民主的活動家」の夫との苦汁に満ちた生活を通して、現代に生きる女性の不幸と、力強さ、

そして、自立した女の苦しみを若い女性に訴える作。

◎「おばけのバーバパパ」 アネット・チゾン著  
偕成社 780円

奇想天外な発想のもとに、子どもの夢をどんどんふくらませる楽しい絵本。

ユーモラスで奇妙なおばけのバーバパパが、自分の姿を変えながら、町に出かけ、皆の人気物になるというストーリー。色あいの美しい、軽快な線描きで幼稚園向け。

◎「わたしのワンピース」 にしまきかやこ著  
こぐま社 750円

やわらかな色調と、子どもの描くような絵の線はとても親しみがある。ワンピースに、風景のもようがうつり変わる単純な形の繰り返しにリズムがあって楽しい。

親子読書用のテキストにむいている。

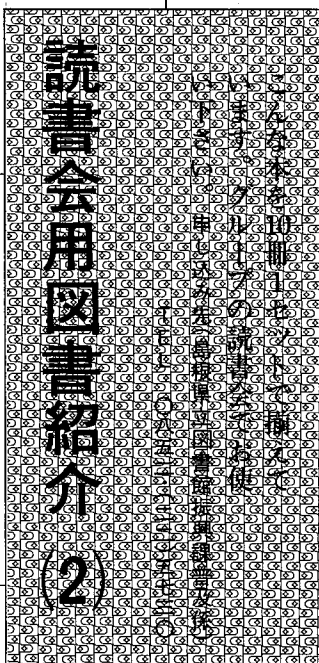
◎「ひかりごけ」 武田泰淳著  
新潮社 180円

氏の作品には、始めも終りもないということがよく言われる。つまり内容がめでたく完結するという作品ではなく、常に1種の永却回帰を繰り返しているというふうに評されている。この作品は生死の境に追いつめられた人間同士が相食むに至る惨

劇を通して極限状況における人間心理を直視した問題作である。

◎「人があつまる」 浜野安宏著  
講談社 1,200円

私達は、家庭を営みながら地域社会の一員として生活している。この居住空間はより人間的、より機能的であるのが理想である。この視点からみて、現実の都市、街を考える時に不満を感じることはないだろうか。自分の住む「町内」を再発見してみたい人に一読をすすめる。





# 読 書 感 想 文

横溝正史

あくま きた ふえ ふ  
「悪魔が来りて笛を吹く」

出雲市大津町町上529

大 滝 博 久

全篇に漂う異様な雰囲気。読む者をして胸苦しき  
さえ覚えさせる。

ディテクティブ ノベル  
これは探偵小説のいわゆる本格物ではない。ディ  
クスン・カー、アガサ・クリスティーなど欧米の探  
偵小説家が推理の完璧性を期し謎解きの興味を身上  
とするのにたいし、「悪魔が来りて笛を吹く」はそれ  
だけではなく社会性を兼ね備  
えている。

本作品はともすると通俗に  
墮しやすいた材料を扱っていな  
がら卑俗に陥ることなく文学  
としての香りを放っている。  
全編に流れるフルートの妖し  
い音色につつまれて展開する  
ストーリー。それは横溝正史  
の耽美趣味を満足させるもの  
である。

横溝正史は探偵小説を推理から社会へ解放した。  
作者は自分で創り出した耽美的世界のなかで深く耽  
溺しているのである。

全体のプロットは先に述べたように通俗的である。  
没落貴族である椿元子爵の失踪。子爵が重要容疑者  
となった天銀堂毒殺事件。子爵の黄金のフルートに  
彩られた連続殺人事件。それらのあいだの相関関係。

椿子爵が娘の美彌子に残した「これ以上の屈辱、  
不名誉に耐えていくことはできないのだ」との遺書  
が事件の恐ろしさを読者の前に暗示する。この遺書  
の包含する意味への興味にひきづられて読みすすん  
でいくとおどろおどろしい悪夢の世界が次第に眼前  
にあらわになってくる。

椿子爵一族をめぐる不倫な家庭の関係。それは内  
容的には低俗の極みである。それにもかかわらず文  
学としての風格をはなっているのは横溝正史が昭和  
26年当時の旧華族の没落というトピカルな問題の底  
に人間の真実をかいま見たからに他ならない。

人間の持つ本質のみにくさ。貴族という庶民とは  
えんのない異質の世界で演じられる狂気。われわれ  
が本書を読み終えたとき言い知れぬ胸苦しさを覚え  
るのはわれわれが無意識のうちに外部から隠そうと  
して内部で眠らせている想像を絶するほどの狂気を  
さまされ、外へひきずり出された衝撃のためであら  
うか。われわれにとって悪魔は内部の狂気であり、

悪魔の笛はそれを外へむき出  
さずにはおかない狂気の音色  
である。

「これ以上の屈辱、不名誉  
に耐えていくことはできない  
のだ」との遺書によって提起  
された連続殺人事件の謎解き  
の面白さ。金田一耕助の推理  
によって次第に明らかとなる  
人間の狂気の態様。黄金のフ

ルートの嫋々たる音色、砂占いの火焰太鼓という小  
道具によって盛りあげられる妖異な雰囲気。作家の  
耽美主義的傾向。

これらの要素によって「悪魔が来りて笛を吹く」  
は探偵小説のジャンルをはみだし独特の文学の世界  
となったのである。

※角川文庫版、横溝正史著「悪魔が来りて笛を吹く」



(読書感想文優秀作の表彰状授与風景)

## あ と が き

一般のみなさんを対象に読書感想文コンク  
ールの募集をしましたところ、多数のご応募をい  
ただき、厚くお礼を申し上げます。優劣をつけ  
がたいほど、立派な作品が多く、そのうち一編  
を掲載させていただきました。

# 視聴覚係からお知らせ

## 新しいフィルムの紹介

社会教育映画

文部省特選

### 親の扶養を考える

カラー 32分

〈内容のあらまし〉

山本ぬい(70才)の扶養をめぐる、彼女の長男一郎(47才)を相手どって、家裁に調停の申し立てをしたのは、彼女の長女、吉野みつ子(42才)である。

調停の申し立てでは、母ぬいが長女の嫁入り先に2年間世話になったが、近々、夫の両親が移り住むとのことから、兄に母のことを相談したが、20年も前の母の仕打を根にもって取り合わないという。一郎はいう「お袋は自分でも次郎に世話になるつもり

で、親父の残した家を弟の次郎に譲ったのだから、次郎が母の面倒をみるのは当然」と。ところが母は次郎の嫁がきらいだから行きたくないという。次郎の嫁貴子は「家のことは私は知らない。主人の

母だから主人がなんといえますか」と逃げる。次郎は「貴子とお袋とうまくいってければ問題は無い。『そんなにお母さんが大事なら、私は子どもをつれて出ていく』と貴子はいうとのこと。女房、子どもを捨て、お袋の面倒をみる気にはなれない」とこぼしている。扶養義務のある兄弟肉親の間に起る争い事は、長い間に積み上げられた理由によるものである。

ぬいについても、夫の死後、家と保険金と賃仕事で一家が生活してきた。一郎は中学を中途退学して青果会社に勤め、みつ子も母を助けて円満だった。やがて一郎が独立する。母はその嫁が気に入らぬと結婚式にも出席しなかった。(この嫁が一番ぬいの味方になっている)その後一郎は家を出たので、ぬいは次郎を頼り家を

譲って、嫁も自分がお気にいりで選んだ人だった。ところがその嫁が、母は口うるさく、とても一緒には住めないというわけである。

3人の家庭状況をしらべてみよう。まず長男の一郎、経済的には安定しているが、子どもが大学高校を目前にして住居のスペースがない。長女みつ子、嫁入先で近々夫の両親が出てきて住むので、まったく無理。次男の次郎、母と嫁と感情的にこじれている今、家にもどることは無理。

最近老人の中には、子どもの世話にならないと老人ホームを希望する人は多いが、条件がなかなか厳しくむずかしい。親を扶養する時期は、子どもを仕上げ、自分の老後を考えねばならない年代に入る。40年後の昭和90年には2.5人で1人の老人を扶養することになるので、今の20代30代の人には深刻である。

調停室で兄妹3人が調停委員の話に基づいて次の通り和解する。一郎が母を引きとり面倒をみる。そのかわりに一郎の長男の下宿代を次郎とみつ子と分に応じて負担する。

こんな時にも親子の心のきずなは大切

なものである。

〈利用のねらい〉

親の扶養については、法律で定め、人倫の道でうたっても、現実にはなかなかむずかしい問題がからんできて、時には家庭裁判所が必要になり、調停が行われて、折り合いのもとにどうやらうまくすんでいるのが実際である。

この映画はその一例を想定して、親と子とともに日頃から考えておくべき問題点を提示して、親の扶養を兄妹で円満にすすめていくうえに示唆するところが大きい。併せて家裁の機能と存在意義を理解するのに役立つものである。

その他のフィルムについては、22・5731(図書館視聴覚係)にまでお問い合わせ下さい。